



言葉は時代とともに

ことば じだい

林 真理子

はし まりこ

上品な言葉というのは、いったいどういうものをいうのであろうか。

がさつな生活をしている私にとって、これはかなりの難問である。

何年前、華族出身の女流歌人の伝記を書いたことがある。その際、東京山の手育ちを自他ともに認める学者から

「これは上流社会の使う日本語ではない」

という指摘を受けた。あまりにも上品過ぎるというのである。確かにそのとうりで、資料を調べると明治の皇后は、キセルをぽんと叩きながら、

「お前さん、そうじゃないかえ」

などと、かなりくだけた言葉を使っていたらしい。けれどもこれを文章にしたら、いったい何人の読者が信じてくれるであろうか。やはり間違っているとわかっていても、

「何々じゃないかしら」

「そうおっしゃっては駄目よ」

という言葉遣いにしなくてはならないのである。

つい先日、明治の文豪を扱ったノンフィクションを読んでいたら、明治の時代、女学生たちが流行らせ、大人たちの眉をひそめさせる言葉が出ていた。

「何々してよ」

「何々なんだわ」

今の私から見れば、もう廃れかかった上品な言葉に思える。最初の「何々してよ」は命令ではなく、肯定の言い方である。語尾をやわらかく上げるのであるが、今はもう使う人は殆どいないだろう。それほど古めかしい丁寧な言葉使用であるが、当時の人にしてみればとんでもないギャル言葉だったらしい。言葉は日ごとに変わっている。しかし今はひどい。

戦後の日本の民主主義というのは、いや、どこの国でも同じだろうが、男女同権を強く推し進めてきた。この国には、男言葉、女言葉というものがあってあるが、それは古めかしいことだという風潮だ。

以前小説の中で、男と女を会話させる時、主語はいらなかった。

「いや、そうは思わないよ」

「それはあなたが間違っているわ」

どちらが男か女がすぐにわかった。けれども若い人たちは、ほとんど同じ言葉を使う。女友だちに呼びかける時、昔は「マリちゃん」という風に「ちゃん」という愛らしいオマケをつけた。けれども今は女の子でも「ハヤシ」と苗字を呼び捨てにする。女の人が高品な言葉を喋らなくなった。小説家にとって苦難の時である。

(小説家)